

女性の願望を語る男性の物語

—センセーション小説における不安を抱えた男性のアイデンティティ—

鈴木 淳*

A Man's Story Telling Women's Desires: Unstable Masculinity in Sensation Fiction

Jun SUZUKI *

Abstract

The aim of this study is to show the plots of women's desires in action in sensation texts. Sensation novels have been generally thought to tell a man's story of the acquisition of his identity as gentleman hero. However, when rereading texts focusing on female characters, we can find another possibility of interpretation of the texts. Then, it is not male protagonists themselves but female characters who actually lead the plots of men's stories, by manipulating the male characters according to their own plans. To put it another way, in the texts of sensation fiction, male protagonists are not telling men's stories of development, but those of contemporaneous women's forbidden and oppressed sexual desire. Moreover, in Collins's text, women's desire is directed not only toward men but also toward women. Female characters create a strong friendship or even a community between women; then, men are eliminated. As a result, the identity of the male protagonist remains unstable in the text.

序

ウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins)の『白衣の女』(*The Woman in White*)は、これまで男性 Walter Hartright を中心とする、D. A. ミラー(D. A. Miller)の言う「警察的機能」を備えた、ジェンダーにおける規律や秩序に向かうテキストと解釈されてきた。たとえば、アン・ゲイリン(Ann Gaylin)は、それをナラティブの権威と結びつけ、Hartright が、盗み聞きの情報により力を失った Marian を家の中に閉じ込め、彼女から「物語のコントロールを取り戻す」ことを指摘する。ゲイリンは、最後の Hartright と Fosco との争いも「ナラティブの権威をめぐるもの」と論じている(133)。また、リン・パイケット(Lyn Pykett)も Hartright のアイデンティティの問題と「男性性と女性性の規範的な見方の回復」(38)を指摘するように、テキストのベクトルは、表向きには Hartright によるジェンダーに関する規律や秩序へと向いている。しかしながら、ゲイリンは、それらの問題に対するコリンズの曖昧な態度にも言及し、「繰り返され、激しさを増す抑圧の中で、

結果として、逆説的に転覆の行為者、アイデンティティ、そしてナラティブを封じ込める手段の無力さを提示する小説となっている」と指摘している(137)。

また、ゲイリンは、Hartright が物語のコントロールを取り戻した後でも、読者の心に残るのは逸脱した初めの頃の Marian や犯罪者の Fosco であると述べる(137)。だが、実際には、テキストで逸脱しているのは Marian だけではない。また、なぜテキストでは「警察的機能」に不安が残るのか。その問題を考えるために、本論では、とくに、テキストにおける「女性の願望」のプロットに注目する。そのような観点からテキストを再読することで、これまでは男性が自らの目的の達成の中で逸脱した女性の願望を封じ込めるとされてきたが、実はテキストでは、男性の成長や野心のプロットとは関係なく、またそれを利用しながら、犠牲者である一方で様々な女性キャラクターが自らのセクシュアルな願望を達成できていることが明らかになる。

コリンズのテキストの中の「男女のプロットの

2016 年 10 月 21 日受理

* 共通教育センター准教授

衝突」(112)については、すでにタマー・ヘラー (Tamar Heller)も指摘しているが、本論では、センセーション小説のテキストにおいて男性のプロットによる規律や秩序の安定性が感じられない理由の一つを、男性が自分の物語を語る中で逆に達成された「女性の願望の物語」にあると論じていく。つまり、男性は、自分が中心の物語を語っているように見えながら、実は、テキストにおいて自らの物語を崩す「女性の物語」を語っているのである。

I

『白衣の女』は、一見すると、男性中心的なテキストである。実際に、物語の表向きプロットは、不安定なアイデンティティを抱えた男性ヒーロー Hartright の成長物語や悪人である Percival と Fosco の社会的アイデンティティをめぐる犯罪物語の体裁をとっている。しかし、よく読んでみると、男性のアイデンティティの不安定さは「女性」によって意識させられ、男性はその後に行動している。つまり、男性は、成長にしても犯罪にしても、自発的に行動しているのではなく、何よりも先に、女性の言動によってアイデンティティの不安を喚起させられ、動かされているのだ。

実際に、テキストにおいて、後に男性ヒーローとして成長する Hartright と、ミステリーを抱えた女性 Anne の出会いの場面は重要である。この場面は、ミラーが Anne の接触により Hartright が女性の特質である神経質を感染させられ、ジェンダー・アイデンティティを侵害された「最も重要な場面」(152)と論じたことでよく知られているが、ヘラーは、ミラーの論に対して、Hartright が Anne との出会いの場面で感染したのは、「女性性」ではなく、Anne が見せた「ルサンチマン」

(126)であると言う。ヘラーによれば、Hartright は、Anne の声に自分の「社会的地位についての自身の敵意」のエコーを感じ取った (126)。実際に、Anne は Hartright がジェントルマンかどうかを問い、そうではないとわかると安心する。ここで重要なのは、Hartright が、自分はジェントルマンではないと苦々しさを持って答えることである。この Anne とのやり取りが Hartright に「自分はジェントルマンではない」という社会的アイデンティティの問題を強く意識させたことは明白である。その結果、ヘラーが言うように、Hartright が「Anne の高い階級、とくに Percival への敵意に感染したのは驚くべきことではなく」、そしてまた、Anne が Laura に書いた、Percival との結婚を警告する匿名の手紙は、「Hartright にとって影響力あるテキスト」となるのである (126)。

ヘラーの解釈は、男性のアイデンティティの不安と女性の言動の関係を考える上で非常に重要である。だが、一つここで付け加える必要があるのは、実際には、Anne は意図的に Hartright のルサンチマンを喚起したわけではないことだ。それは Hartright を主人公としたテキストの男性中心的な読みであり、その観点からの読みでは、従来の解釈と変わらず、テキストのベクトルの方向が不安定な男性の成長と、最終的な男性のアイデンティティの確立にあるということになる。¹

むしろ、本論で指摘したいのは、その問題にも関連する、これまで見落とされてきた Anne の「女性の願望のプロット」である。この点に関しては、以前に別の論稿でも触れたことがあるが、そもそも Anne の手紙は Hartright の成長物語のために書かれたものではない。² それは、Anne が Laura の母親への恩返しとして書いたものである。したがって、そこにあるのは、Anne と Mrs. Fairlie のいわば「女性同士の絆」なのだ。つまり、テキストでは二つのプロットが絡み合っている。それは、表向きの男性 Hartright の成長物語のプロットと、一方では、Anne 自身の女性同士の絆を描く物語プロットである。

実際に、読者は、Hartright が Anne に話を聞くために Laura の母親が埋葬されている墓に向かう場面で、その男性の探偵物語のプロットとはまったく無関係な Anne の Mrs. Fairlie に対する「女性のセクシュアリティ」を垣間見ることになる。そのとき、Hartright が目にするのは「Mrs. Fairlie の墓にキスをする Anne の姿」であり、また、Anne の言葉からも女性同士のセクシュアリティを読み取ることができる。

‘Oh, if I could die, and be hidden and at rest with *you!*’ Her lips murmured the words close on the grave-stone; murmured them in tones of passionate endearment, to the dead remains beneath. ‘*You* know how I love your child, for your sake! Oh, Mrs. Fairlie! Mrs. Fairlie! Tell me how to save her. Be my darling and my mother once more, and tell me what to do for the best.’

(*The Woman in White* 103-4)

Anne は、「Mrs. Fairlie と同じ墓に入り、一緒に眠りにつく」ことを切望する。テキストではこの Anne のセリフがあとで再び重要な意味を持つてくるが、ここではそれが Anne と Mrs. Fairlie の女性同士の絆を示すものであることだけ確認し

ておく。

このあと、Hartright は、Anne が激しく手を打ちつけながら再び墓にキスする音を聞き、強く影響を受ける（104）。つまり、テキストでは、Hartright の成長物語のプロットを提示しているように見えながら、その物語の目的達成のためのミステリーは謎のままで、その代わりに示されるのは、女性同士のセクシュアリティ、または女性同士の絆なのである。このように、男性が自身の物語を進める中で明らかにするのは、これまでテキストの表に出てこなかった「女性の願望やセクシュアリティの声」なのだ。

こうした男性の物語プロットへの女性の願望による脅威は、一見すると男性のプロットの犠牲者と見える女性の姿にも見られる。テキストにおいて、Laura と姿が似ている Anne は、Fosco の策略により、Laura の身代わりとして監禁され、病気の発作による死を迎える。表面的に見れば、これは、男性の犯罪の物語プロットによる女性のコントロールと解釈できる。しかし、実際には、Anne は、予想外の早すぎる死によって Fosco の完璧なはずのプロットを破壊する。さらに、テキストにおける女性の願望の物語プロットの脅威はそれだけではない。Anne は Laura として埋葬されるが、重要なのは、その際に、死によって Anne が自分の願望を成就していることである。テキストでは、先に見たように、以前から Anne は Mrs. Fairlie と同じ墓に入ることを望んでいた。つまり、Anne は、Laura の身代わりとして他人の目的のために利用されるのではなく、その他人の物語プロットを自身の物語のために逆に利用したことになるのだ。Anne の埋葬に関して、ヘラーは、「力を奪われた女性の抵抗」として、死後の「女性中心の天国」、「女性の至福千年説」を論じているが（125）、Anne の脅威は、男性のプロットの犠牲者に見えながら、結果的にそれを破壊し、本来ならば不可能な自らのセクシュアルな願望を達成していることにあると言える。もちろん、Anne の死は意識的な結果ではないにしても、Anne の行動が「自分の近い死を予言していた」上でのものだったことは重要である。

II

また、男性主導のプロットを破壊する「女性のセクシュアリティ」が導くプロットに関しては、多くの批評家たちから「逸脱した女性」と評されている Marian を考えなければならない。テキストでは、Marian は男性のような顔と描写され、Fosco と Percival の会話を雨の中で立ち聞きする強い女性として提示される。だが、シャロナ・パール(Sharrona Pearl)は、コリンズのテキストで

は、そのような男性権力への脅威となる Marian を、Fosco が「催眠術」でおとなしくしたと述べた(172)。この場合、「催眠術」とは、パールも言うように、女性をコントロールするコリンズの「最も強力な道具」なのだ。

[...] Mesmerism is his most powerful tool to reinscribe gender ideologies, using it to render active woman passive, and passive men active. This tool of dominance is used by men alone, reinforcing notions of science as masculine and all-powerful.

(Pearl 163)

パールによれば、催眠術は男性と女性に対して、それぞれのジェンダーに合った「適切な行動をもたらす」、「父権的権力を支持する」ものであり、さらには、「その女性の身体を支配する手段によって、男性は女性のセクシュアリティを支配することができる」（163）。男性の指示により催眠術にかかった女性は、「恍惚状態」（Pearl 163）となる。この点に関しては、パール自身も論の中で引用しているが、Marian は、最初から Fosco の催眠術の犠牲者となることを予想していた。

And the magician who has wrought this wonderful transformation – the foreign husband who has tamed this once wayward Englishwoman till her own relations hardly know her again – the Count himself? What of the Count?

This, in two words: He looks like a man who could tame anything. If he had married a tigress, instead of a woman, he would have tamed the tigress. If he had married *me*, I should have made his cigarettes as his wife does – I should have held my tongue when he looked at me, as she holds hers.

I am almost afraid to confess it, even to these secret pages. The man has interested me, has attracted me, has forced me to like him. In two short days, he has made his way straight into my favourable estimation – and how he has worked the miracle, is more than I can tell.

(*The Woman in White* 217)

ここでは Marian から見た Fosco の魅力が描かれている。さらに、パールも指摘するように、それを「秘密のページに告白」しなければならないという「恐れ」は、「自身のモラルを維持することへの不安から生じている」(Pearl 180)のだ。そこから、Fosco の魅力がどのような性質のものなのか容易に推測できる。引用に続く箇所でも Fosco は「ナポレオン」にたとえられ、その「目」が Marian に「センセーション」を感じさせたと言われる(*The Woman in White* 218)。このように、Marian は、自分が Fosco の性的魅力によって力を失うことを予想していた。

実際にテキストでは、雨の中での立ち聞きの後でチフスにかかった Marian は、Fosco によって日記を盗み読みされる。ゲイリンやナタリー・アビ=エッジ(Nathalie Abi-Ezzi)などの批評家たちは、そのような Fosco の行為を、女性の逸脱した行為への報復としての「テキスト上の暴力」(Gaylin 128)、あるいは「象徴的な性的暴力」(Abi-Ezzi 170)と解釈している。その結果、力を失った Marian は、男性である Hartright に助けを求め、最後には、「家事」という当時の女性のコンベンショナルな役割を果たすだけの存在となる(*The Woman in White* 433)。

Fosco の催眠術の力は、Hartright のリベンジに対する Fosco からの Marian への忠告にも確認することができる。面白いのは、そのとき Marian が強調するのが、警告の内容よりも Fosco の Marian への愛情と Fosco の「視線」であることだ。

‘It is hard to acknowledge it, Walter – and yet I must. I was the only consideration. No words can say how degraded I feel in my own estimation when I think of it – but the one weak point in that man’s iron character is the horrible admiration he feels for me. I have tried, for the sake of my own self-respect, to disbelieve it as long as I could; but his looks, his actions, force on me the shameful conviction of the truth. [...]’ (547)

Marian による Fosco の愛情と視線の事実の強調は、以前に Marian が Fosco の目に魅了されていたことを考えると、それを嫌悪しながらも、むしろ Marian も以前と同じ意識なのではないかという疑問も湧いてくる。この Fosco の愛情に関して、パールは、Marian が Fosco の愛情という慈悲へ

の依存を認識しながら生きるため、Fosco が Marian に対して究極的な支配を維持し続けると解釈している(173)。

しかしながら、ここで考える必要があるのは、まさにその Fosco の Marian への愛情に関してである。その点については、Marian が Fosco に魅了されているだけでなく、Fosco 自身が Marian に性的意味で魅了されているという批評がある。キャサリン・ピーターズ(Catherine Peters)は、Marian の「セクシュアルオーラへの Fosco の熱心な反応」を指摘し(223)、リチャード・コリンズ(Richard Collins)は、Fosco が Marian に対して「高まった女性のセクシュアリティ」を見ていて、テキストでは「美しくない」として描かれた Marian の顔を「魅力的であると解釈している」と述べている(155)。また、そのような性的意味での魅了のされ方にも考察すべき点がある。さきほどパールの論の引用部分では催眠術が「男性によってのみ実践される」と述べられていたが、実は、コリンズのテキストでは、そうとも言えない可能性が提示されているのである。

それでは、まずは、Fosco の Marian への愛情がどのようにして生まれたのかを見てみたい。それは、Marian が病気の際に、Fosco がそれまで Marian が書いてきた日記を読んだことと関係がある。Fosco が Marian の日記を読んだのは、犯罪計画をうまく進めるためである。だが、その男性の犯罪のプロットの手助けと同時に、実は日記にはもう一つの物語が進行していて、Fosco はその物語プロットに影響を受けていた。それは、Fosco に対する Marian の高い評価であり、いわば Marian の恋愛感情である。もちろん、Marian の感情自体が Fosco の催眠術によるものである可能性は否定できない。だが、催眠術によって生まれた Marian の女性としてのセクシュアリティが、今度は、催眠術をかけた当事者である Fosco 自身を支配することになったのだ。

そうすると、Marian の日記を Fosco が盗み読むという、ゲイリンの言うところの「テキスト上の暴力」は本当に暴力だったのかという問いにもつながってくる。つまり、Fosco は、Marian の日記を読み、そこで男性としての自分への高い評価を確認し、その結果、自身も Marian からいわば催眠術のような影響を受けたと言えるのではないだろうか。というのも、Fosco は、Marian への強い崇拝の感情を見せる。さらに、物語終盤で Walter に対して、Fosco は Marian への「愛」を告白するが、その際に注目すべきは、Fosco が Marian を崇拝するだけでなく、自らを「操り人形」と呼んでいることである。

Just Heaven! With what inconceivable rapidity I learnt to adore that woman. At sixty, I worshipped her with the volcanic ardour of eighteen. All the gold of my rich nature was poured hopelessly at her feet. My wife – poor angel! – my wife who adores me, got nothing but the shillings and the pennies. Such is the World; such Man; such Love. What are we (I ask) but puppets in a show-box? Oh, omnipotent Destiny, pull our strings gently! Dance us mercifully off our miserable little stage! (*The Woman in White* 599)

Fosco は、女性としての Marian の魅力によって操り人形と化す。そう考えると、Fosco の日記を盗み見るという行為は、男性による女性支配だけでなく、「女性による男性のコントロール」でもあるということになる。この点に関しては、Fosco 自身が、Marian は唯一の自分の「弱点」であり、計画を完全に遂行できなかった理由だったと述べることから分かる(611)。つまり、Marian は、力を奪われると同時に、自らのセクシュアリティを通して、男性しか使えないとされた催眠術を用いることで、Fosco の犯罪の物語プロットを破壊してもいたのである。

III

最後に、Hartright の成長物語の最終的な目標である Laura との結婚について考えたい。たしかに、Hartright は、Laura と結婚する。だが、テキストが最後に提示するのは、Hartright の成長物語を破壊しかねない Laura と Marian の女性同士の間の絆である。この点に関連して、ロス・G・フォーマン(Ross G. Forman)が、シャロン・マーカス(Sharon Marcus)の論に触れながら、「ヘテロセクシュアルと同時に働くホモソーシャルおよびホモエロティック」な関係を指摘し、「男女の結婚が女性同士の友情に依存している」と論じている(419)。実際に、テキストでは、Hartright との関係以前からの、「私は Laura がいないと生きていけないし、Laura も私がいなくて生きていけない」(*The Woman in White* 37) という Marian の言葉からも分かるように、Laura と Marian の間の絆の強さが言及されていた。つまり、中央アメリカに赴き、ヒーローとして戻ってきた Hartright によって最後に達成されたのは、その「女性同士の絆」だったのだ。

この点に関して問題なのは、ヘラーが述べるよ

うに、「ドメスティック・イデオロギーのコンテクストにおいて、同性間の友情は、潜在的に転覆を引き起こす可能性がある」(129)ことである。実際に、ヘラーも指摘する Marian の「男性支配へ抵抗する女性の連帯」(129)は、一つには、テキストにおける Limmeridge の屋敷への引っ越しのエピソードに現れている。というのは、Hartright も知らないうちに、Marian と Laura は住所を移っていた。さらに、知らせを受け、屋敷に向かった際の Hartright の驚きは、次のように描写される。

My wife and Marian were both up-stairs. They had established themselves (by way of completing my amazement) in the little room which had been once assigned to me for a studio, when I was employed on Mr. Fairlie's drawings. On the very chair which I used to occupy when I was at work, Marian was sitting now, with the child industriously sucking his coral upon her lap – while Laura was standing by the well-remembered drawing-table which I had so often used, with the little album that I had filled for her, in past times, open under her hand. (*The Woman in White* 626)

その際、重要なのは、この時点で物語のヒーローとなったはずの Hartright が「昔雇われていた時のこと」を思い出させられることである。しかも、Hartright は、そのときに自分が使っていた机を奪われている。机は、Laura と Hartright の息子を抱いた Marian が占拠している。その結果、Hartright の居場所がない。さらには、Hartright には、もはやテキストにおいて発言権すらないのである。というのも、Hartright は、引っ越しに関する質問を Marian にさえぎられ、また、以前は沈黙していた Laura が Hartright よりも先に話し始めるのだ。重要なのは、そのとき「女性同士の絆の物語」が示唆されることである。引っ越しの理由について、Laura は、「私たちの大胆さ」というように、Marian と自分の行為を表現する。そこには、もはや Hartright を介さない Laura と Marian の女性二人が導く「未来」の物語があった。Marian は、次のように言う。

‘There is not the least necessity for doing anything of the kind,’ said Marian. ‘We can be just as explicit,

and much more interesting, by referring to the future.' She rose; and held up the child, kicking and crowing in her arms. 'Do you know who this is, Walter?' she asked, with bright tears of happiness gathering in her eyes.

(626)

その「未来」の物語では、テキストの語り手である Hartright が知らないことが起きていた。息子を指して、「こちらが誰か知っていますか」という Marian の質問への、Hartright の「私の息子ですよ」という返答は、あたかも最初から否定されるために誘導されたかのようである。Hartright は、その質問の瞬間まで、自分の息子が「Limmeridge の屋敷の相続人」(626)となっていたことを知らなかったのだ。

ここで重要なのは、Marian によって否定されたのが、それまでの物語で確立されたと思われた Hartright の社会的アイデンティティと、さらには、Hartright のテキストにおける物語の語り手としての資格であることだ。テキスト最後の場面における「男性のアイデンティティの不安定さ」に関しては、ヘラーも、「ジェントリーからの高潔な独立として定義される Hartright のブルジョワ男性性の探求が、自らの勤勉ではなく、ジェントリーからの相続によって Limmeridge の屋敷の住人となることで、アイロニーとなっている」(139)と指摘する。しかも、ヘラーによれば、Hartright の相続は、あくまでも、ジェントリーである「息子を通して」のものなのだ(139-40)。

一方で、テキストの語り手としての資格に関しては、Laura と Marian の未来の計画を知らなかった Hartright には、もはやこの物語を記録し続ける資格はないと言える。このことは、Hartright 自身が最初に物語を語り始める際にテキストで言っていたことであつた。³

こうして、それまで Hartright が物語を語ってきたテキストにおいて、Marian は最後に自身と Laura が導く「未来の物語」を提示することで、Hartright から語り手としての権威を奪う。その結果、Hartright の「手の中でペンは震え」(*The Woman in White* 627)、男性の物語は、ヘラーの言う「ゴシック的空白」(141)で終わる。おそらく、その空白において、Hartright は、自分が語ってきた物語が自身の成功を描くためのものではないこと、そして、女性の「未来の物語」によって、自分がもはやテキストの語り手ではないことを認識させられるのである。

IV

以上のように見てくると、テキストにおいて、男性は、犯罪物語にしても成長物語にしても自分の物語を語ることに成功していないことが分かる。この一見すると男性の願望の物語を語っているかに見えるテキストの「女性同士の絆」による侵食は、テキストで Mrs. Fairlie の墓に Anne の墓碑銘が残されることにも象徴的に現れている。それは、秩序を回復したかに見える父権制のテキストに残る女性同士のセクシュアリティの痕跡であり、言い換えれば、不安定な男性のアイデンティティの証拠である。このように、男性のアイデンティティをめぐる物語は、常に女性のセクシュアリティをめぐる物語に脅かされている。しかしながら、男性は、自身のアイデンティティの物語を語らなければならない。その結果、男性の成長物語を描くテキストは、その物語を語り終えることで、逆に自身の物語を崩す「センセーション小説」となるのである。

注

*本研究は JSPS 科研費(25770112)の助成を受けたものである。また、本稿は、日本英文学会第 87 回全国大会(於: 立正大学品川キャンパス 2015 年 5 月 24 日(日))において、「女性の願望を語る男性の物語—センセーション小説における不安を抱えた男性主導のプロット—」と題して行った口頭発表の内容に一部加筆・修正したものである。

1. ピーター・トムズ(Peter Thoms)は、自身の論の中で、コリンズの *The Woman in White* を、簡単にまとめるならば、「他者による不正のプロットを書き直し、自己アイデンティティを確立するプロセス」として解釈している(74)。その際に、主人公たちは、「神の目的のプロット」と「個人のモラル」による「自由」を達成する(77)。

2. この問題に関しては、拙論『『カスターブリッジの町長』をセンセーション小説として読む—センセーション小説における女性主導のプロット—』(『ハーディ研究』No. 40)、pp. 24-5 を参照。

3. テキストの始めの部分で、Hartright は、もし自分の直接的な「経験」を語ることができないなら、「語り手としてのポジションから降りるだろう」と言っている(*The Woman in White* 8)。

参 考 文 献

- Abi-Ezzi, Nathalie. *The Double in the Fiction of R. L. Stevenson, Wilkie Collins and Daphne du Maurier*. Oxford: Peter Lang, 2003. Print.
- Collins, Richard. “Marian’s Moustache: Bearded Ladies, Hermaphrodites, and Intersexual Collage in *The Woman in White*.” *Reality’s Dark Light: The Sensational Wilkie Collins*. Ed. Maria K. Bachman and Don Richard Cox. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2003. 131-72. Print.
- Collins, Wilkie. *The Woman in White*. Ed. Matthew Sweet. 1999. London: Penguin, 2003. Print.
- Forman, Ross G. “Queer Sensation.” *A Companion to Sensation Fiction*. Ed. Pamela K. Gilbert. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011. 414-29. Print.
- Gaylin, Ann. *Eavesdropping in the Novel from Austen to Proust*. 2002. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. Print.
- Heller, Tamar. *Dead Secrets: Wilkie Collins and the Female Gothic*. New Haven: Yale University Press, 1992. Print.
- Miller, D. A. *The Novel and the Police*. Berkeley: University of California Press, 1988. Print.
- Pearl, Sharrona. “Dazed and Abused: Gender and Mesmerism in Wilkie Collins.” *Victorian Literary Mesmerism*. Ed. Martin Willis and Catherine Wynne. Amsterdam: Rodopi, 2006. 163-81. Print.
- Peters, Catherine. *The King of Inventors: A Life of Wilkie Collins*. 1991. Princeton: Princeton University Press, 2014. Print.
- Pykett, Lyn. *The Nineteenth-Century Sensation Novel*. 2nd ed. 1994. Tavistock: Northcote House, 2011. Print.
- Thoms, Peter. *The Windings of the Labyrinth: Quest and Structure in the Major Novels of Wilkie Collins*. Athens: Ohio University Press, 1992. Print.
- 鈴木淳 「『カスターブリッジの町長』をセンセーション小説として読む—センセーション小説における女性主導のプロット—」 『ハーディ研究』（日本ハーディ協会会報 No. 40）、2014年、20-36. Print.